

バトン・ルージュ

大島 行雲

その日は、朝から雨だった。

拷問の様な暑い夏は終わり、すっかり空気が冷たくなった秋の夜、しとしと降る雨の下、僕は新宿の東京厚生年金会館にきた。

ルー・リードの来日ライブだった。それほど音楽が好きなのに、滅多にライブに行く事などない僕だったが、ルー・リードだけは別だった。初めて彼の歌を聴いた時、何かが僕の胸の内ですくみまわされた。映画『私は、うつ依存症』の女』でクリスティーナ・リッチ演じる鬱病の主人公が異常なまでに彼に惹かれていたのも分かる。以来、自分も薬物中毒の様に彼の歌を聴いていた。今日も誰を誘う事もなく、独りでここに来ていた。自分にとって、ルー・リードは誰にも侵す事のできない自分だけの居場所だった。

開演間際に会場に着いた僕は、荷物と傘を座席の下に置くと、何気なくステージ上の楽器類や満席の客の様子を眺めた。

ほんの少しだけ呼吸が荒くなっているのを感じる。駅から早足で来たからではない。初めて生で聴く彼の歌声と演奏に、かつてない興奮と期待を抱いていたからだ。

ふと、前の座席の女性が振り向いた。そして、僕は凍りついた。

薫

すぐに彼女は前へ向き直る。

薫だ。いや、薫に似ている。本当に薫なのか。ポップでも特にBzが好きな筈の彼女の音楽の趣味に、アングラのカリスマの如きルー・リードは余りにも似合わない。薫に似た女性は、左隣に座る連れらしき男性と親しげに話している。彼の趣味に付き合っただけだろうか。

数ヶ月前、一人暮らしのアパートに帰ると、一枚の葉書が届いていた。今時、正月を除いて手紙が送られてくる事は殆どない。予期した通り、結婚を知らせるものだった。写真の二人の男女は、一瞬、見ただけでは覚えがなかった。送り主の名字も。新婦の名を見て、漸く僕は知った。

薫

僕が知っていた薫は、もう少しふっくらした丸みのある顔と体つきだった。水色のドレス姿で見知らぬ男の横に寄り添い、幸せそうに微笑む彼女は、ダイエツトでもしたのか、すっかり痩せて雰囲気が変わっていた。彼女だと思っただけで、確かに彼女には見えるのだが、その程度だ。今となつては相手の男性の顔などは全く覚えていない。それが左隣の男性なのかもしれない。

声をかけようか。だが、人違いかもしれない。本人だとしても、本人であればこそ、そして、夫かもしれない人と一緒にあればこそ、声はかけられなかった。

結婚の知らせを送られて無視する訳にもいかなかった。しかし、

連絡して話したり会ったりなどできる筈もなかった。僕は地元のデパートから高級タオルをお祝いとして送った。手紙は添えなかった。何を書けばいいのかわからなかったからだ。無論、彼女の幸せを祝う気持ちは誰よりもあつたが、それだけでもなかった。様々な感情や想いが錯綜して、それを適切に伝わる様に文字にする事はできそうになかった。ましてや、彼女の夫も読むだろうと考えれば尚更だ。かと言って、通り一遍の挨拶などは書きたくない。僕は沈黙という言葉を選んで、彼女の解釈に任せる事にした。

数日後、彼女から返礼として石鹸の詰め合わせが送られてきた。緑茶、烏龍茶、それにダージリンの香りの洒落たもので、それは、まるで彼女の放っていた甘苦しい香りの如く僕の胸を締め付けた。そこには彼女の自筆のメッセージも添えられていた。通り一遍だが、とても丁寧な彼女らしい言葉だった。彼女もまた、そこに僕に解釈させようとしている想いを感じた。それは、やはり僕と同じ複雑な感情の様に思えた。

僕の呼吸は荒くなる。鼓動は速くなる。

さっきまでの興奮と期待とは全く違う、戸惑いに満ちた想いで、僕は彼女の後ろ姿を見つめる。

照明が落ちた。

僕の呼吸は、僕の鼓動は、一層、速くなる。何もかもが綯い交ぜになって、僕を混乱させる。

ステージの袖から四人の男と一人の女が現われる。拍手が湧き

上がる。中央の男がギターを手にすると、その音は増大する。ライブは始まった。

初めて聴くルー・リードの生の歌声と演奏に惹かれながら、一方で、僕は前に座る彼女が気になってならなかった。

高校時代の薫は小さな顔にセミロングの髪、小さい鼻で誰よりもキラキラした瞳の持ち主だったが、夜更かしの癖があつて、目の下に不健康な隈が少し浮いている事があつた。若さの輝きとも言えるツルツルの肌をした女子高生を見かけると、今でも僕は薫を思い出す。僕らの時代はミニスカートなど穿いてはいなかったが。

巨人ファンの薫にせがまれて、何度か僕らは東京ドームに野球を見に行った。嬉々として巨人グッズを買い、立ち上がってメガホンを振り上げてはしゃぐ薫に、自分は野球が嫌いだとは言えなかった。

ルー・リードが、『バトン・ルージュ』を歌っている。

僕はアンデルセン公園を思い出す。丁度今と同じ秋の或る日、その日は今日と違ってデート日和の雲一つない青空で、薫の笑顔と共に物語の一場面の如く美しい光景だった。降り注ぐ眩しい陽光が薫の白いブラウスの下の線をつつすらと透かし、僕は目のやり場に困つたのを覚えている。彼女は無邪気だったのか、それとも僕を信頼しきっていたのか、そんな事は全く気にしてなどない様子だったのも。

三年後、僕らは別れた。

恐らく、これまでの一生で、誰よりも真剣に愛したのに、手に入れる事ができなかった。僕は未だに思う。どこで愛は終わり、それは、なぜ訪れたのだろうか。

薫は結婚した。

僕は一人だ。

前に座っているのは薫なのか。

後ろで思い悩む男は、確かに僕だ。

悶々としつつ、ルー・リードの歌と薫の思い出が僕の胸を鈍く締め付け続けた。何分も、何十分も。茨の上に座り続けているかの様な、耐え難く痛む時間が過ぎていく。僕は水の中で息を止めているのにも似た思いで、解放される時を待っていた。これまでもずっと待ち続けてきた。自分の至らなさ、自分の過ち、それらを幾度も反芻し、血が滲むほどに嘔み締めた。原因となった数多の問題を見つける事はできても、答えを見つける事は全くできないままに。

ライブは終わり、会場の照明が点いた。

次々と客が立ち上がり、彼女も立ち上がった。彼女に向かって、隣の男性が言った。

「アキコ、」

ホツとした。でも、残念でもあった。